

文部科学大臣奨励賞

父からもらったラブレター

福岡県 大野城市立大野中学校 三学年

大塚 奏

「もしお父さんが死んでも、大学までは行けるから安心してね。」
進路について話し合っていた深夜、母が冗談混じりに口にした。
「お父さんが死ぬって、どういうこと。」

驚く私に、母は一枚の書類を見せてくれた。父が加入している生命
保険の証券だった。契約日は二〇〇一年二月。私が生まれて一カ月後。
その時、父は二十九歳だった。

ショックだった。初めての子どもを抱いて、幸せいっぱいの中で、
自分の死を考えていたなんて。それを当たり前のように話す母も、
とても冷たい人に見えた。私が初めて身近に意識した生命保険への
印象は、最悪だった。

昨年の夏、福岡県筑前町の町立大刀洗平和記念館を訪ねた。太平
洋戦争中、多くの特攻隊員が飛び立った中継基地があった地だ。

企画展で、博多のちょうちん職人だった伊藤半次さんが、戦地か
ら妻や子どもたちに宛てて送った四百通の絵手紙が展示されていた。

戦地で描かれたとは思えない色鮮やかな一枚一枚に、半次さんの
家族への思いがあふれていた。

「子供の大きくなるのが帰還の楽しみ」

「お前たちの夢を見るのが楽しみだよ」

その中に、自分宛の慰問袋を詰める妻と生後間もない次男の様子
を描いた一枚があった。添えられていた一言の重さに、涙がこみ上
げた。

「この中に入って、私のところに届けばいいのに」――。

この中に入って、とは、会いたくてたまらないわが子のことだった。
ああ、そうだったのか。半次さんの絵手紙で、私は母のを見せてく
れた保険証券の意味を、すべて理解した。

生まれてから十四年間、私はたくさんの人の愛情に包まれ、成長
してきた。両親は厳しい面もあるが、いつも笑顔で見送り、出迎え
てくれる。三歳下の、かわいい、かわいい弟もプレゼントしてくれた。

初めての子である私が生まれた日、父はどんなことを考えながら
私を抱っこしたのだろう。この子はどんな道を歩んでいくのかな。

第53回中学生作文コンクール

勉強が好きになりなかな、スポーツが得意な子になるかな。でも何より、健康でいてほしい。やりたいことを思う存分やってほしい。そのためには、せめてこの子が巣立っていくまでは、自分が元気でいなければ。でも、もし、万が一――。

それは、戦場の半次さんも同じだったはずだ。自分が生きて帰ることができなかつたら、あの子はどうなるのか。半次さんはそんなことを考えながら、望みもしない戦地に立っていたのだと思う。

私には、農業について学び、「食」に携わる仕事をするという目標がある。両親とも何度も話し合い、やっと目指すべき進路が見えてきた。かなり厳しいことも言われた。打ちのめされ、悔しくて泣いたことも数え切れない。それでも私は、全力で目標に向かう。七十年前、遠い日本の子どもたちのことを案じた半次さんのように、両親も私を見守り、支え続けてくれると信じている。

私が生まれたあの冬の日。父は、幸せ「なのに」万が一のことを考えたのではなかった。幸せ「だから」考えたのだ。腕の中の私のことがかわいくて、何より大切な宝物だと実感したから、私を困らせることだけは絶対にしたくないと、保険に入ったのだ。

半次さんは、激戦地の沖縄で亡くなった。家族への四百通ものラブレターを残して。

冷たく見えたあの保険証券は、父から私へのラブレターだった。「娘を守る。」という決意表明だった。私の胸にはいつも、父からもらったラブレターがある。守られているという安心感に包まれているから、私は夢を抱き、前だけを見て歩くことができるのだ。